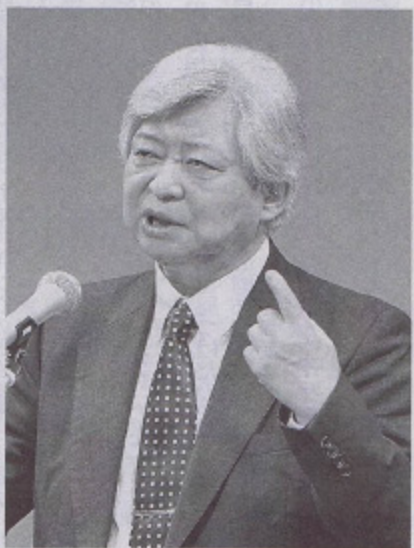


「歴史の因と果を考える」(和20年)1月には三河地震というの、簡単に言えば今がどんな時代であり、これからどこへ向かうのかという事です。3月11日に東日本大震災が起こり、あらためてこの問題を問い直すことが求められていきます。

日本の場合、天災には人災がつきまといつてきました。天災を完全に防ぐことはできませんが、どう対応するかは政治の問題であり、その時代に生きた人間の責任です。天災に伴う人災を防ぐ知恵、できるだけ小さくする知恵を次の時代に残す役割があるのです。1944年(昭和19年)12月に東南海地震、45年(昭和20年)1月には三河地震がありましたが、ほとんど報道されていません。三河地震では2千人以上が犠牲になったにもかかわらず、昭和50年代に名古屋大学などが再調査するまで文字による記録はなかったのです。

## 保阪正康氏



ほさか・まさやす ノンフィクション作家。39年(昭和14年)、札幌市生まれ。札幌東高を経て同志社大卒。出版社勤務などを経て作家活動に入り、主に昭和史をテーマに多数の作品を発表。04年に菊池寛賞受賞。著書に「東條英機と天皇の時代」「あの戦争は何だったのか」「昭和陸軍の研究」「1989年の因果」など。

や朝鮮人だ」というテーマで虐殺があった。そういった人災を歴史の中に抱えていくことを知っておかなければなりません。

## 人災防ぐ知恵後世に

23年(大正12年)の関東大震災の資料を整理してみて、被災者に対する冷たさ、残酷さを感じました。近代日本の軍事指導体制が貫徹

していく中で「自分じやなくって良かった」という感想が出るような倫理観がつくられていった。また「井戸に毒を入れたのは中国人

た。東京や東北の富裕層がホテルを借り切っていると。情報の量にはらつきや占有化があり、多くの国民には的確に伝わっていない。こういうアンバランスな状態は社会的な不公平を生みます。情報の発信者に国民に同じ量、同じ質で出すよう求めなければなりません。

48年に米国が原子力について「20世紀前半は兵器として使った。これからは平和的に使う」と宣言しました。原爆という悪魔のシステムを平和利用という天使のシステムに変えようとしたのです。しかし本来に平和利用にシステムを変えたのか。それならばゼスリ

姿勢が欠けていた。人災の影響は私たちがだけの時代にどまりません。4、5代先の人たちに「あの時代の人を恨む」と言われないよう記録を残し、何が欠けていたのかを総括しなければいけない。

こだわらなければならぬのは原発の問題です。私は月に1回ほど京都に行きますが、地震の2、3カ月後からそれまで宿泊していたホテルが満員になりました。

人災をなくすことで、天災を天災で止める力を持たなければなりません。それが歴史から学ぶということじゃないでしょうか。私たちは重要な問題を天災にかこつけて忘却している、天災に責任を押しつけているのではないかという感じがします。それに気づくことが大事であり、人災というものをあらためて考えてみようと呼びかけたいと思います。